

## 4 地域住民調査

本調査は、いわゆる雪だるま方式で、紹介者から紹介者を通して行ったものである。したがって、本地域の住民を代表するものとしてその結果を読み取るべき調査ではない。また、必ずしも調査者への徹底が十分ではなかったが、調査意図は、支援の担い手としての地域住民の可能性を探ることにあつたことから、対象は、地域に対する愛着や貢献意識が比較的高い者に偏っている。以下の調査結果を見る上ではその点に留意する必要がある。

### (1) 単純集計から読みとれる傾向

#### ア) 地域への愛着と貢献

被調査者 30 名<sup>1</sup>の平均居住年数は、32.6 年と比較的長い(最小値 5、最大値 64、標準偏差 18.1)。居住継続意向としては、「出来るだけ今の家に住み続けたい」28(93.3%)が非常に大きな割合を占めている。

そして、住民がずっと住みつづけるために必要な事柄としては、「近所で助け合っていくこと」20(66.7%)が最も多く、それに続いて「若い世代の転入を促すこと」8(26.7%)<sup>2</sup>、「行政がもっとサービスを充実すること」4(13.3%)が挙げられている<sup>3</sup>。「近所で助け合っていく」という共助的要素が高い割合であるのに対して、「行政がもっとサービスを充実する」という公助的要素が低い割合であること、そして、高齢化率 35%超を背景として「若い世代の転入を促すこと」というソーシャルミックス的要求が見られることは、特筆すべき点であるように思われる。

また、「その他」の内訳として、「若い世代が地域の催しに参加し、世代から世代へ地域の役割を受け継いでいくこと」(調査票 15)、「子どもも含め、自治会が盛んに活動し続けること」(調査票 19)、「昔はみんなよく外に出て話していたけれど、みんな高齢になり、外に出なくなった。昔のように、話したり、交流出来るといいと思う」(調査票 17)、「呼びかけても高齢者はなかなか出てこない。急には高齢者との融合は難しいので、現在のそれぞれの世代が仲良く、横のつながりを持つことが大切ではないか」(調査票 22)といった声が寄せられている。

<sup>1</sup> 被調査者のプロフィールは、男性 6(20.0%)・女性 24(80.0%)である。なお、年齢については訊ねていない。

<sup>2</sup> 若い世代の転入に関連して、「この地域が大好きでずっと住み続けたいと思っているので、若い人が増えてほしい。今のままでと将来子どもができたときに近所に同級生がいない可能性も出てくる……この地域は古くからの家が多く、新しく来た人が住む家がない。若い人が好むようなアパートやマンションもないし、それらを建てる土地もない。地域で生まれ育った人が結婚しても地域内のアパートに住んでくれると、この地域も老人ばかりにならないのでは」(調査票 6)というような、若年層向け住宅の建設に対するニーズも見られる。

<sup>3</sup> 行政サービスの中身として、「実際にすみずみ一軒一軒歩いて問題点を肌で感じてほしい……リーダーを育てる意識を持ってほしい」(調査票 8)、「浜脇 2 丁目には公園がないので欲しい」(調査票 23)、「介護認定査定が厳しくなり、リハビリが受けられなくなり、十分に健康回復ができない」(調査票 26)等が求められている。

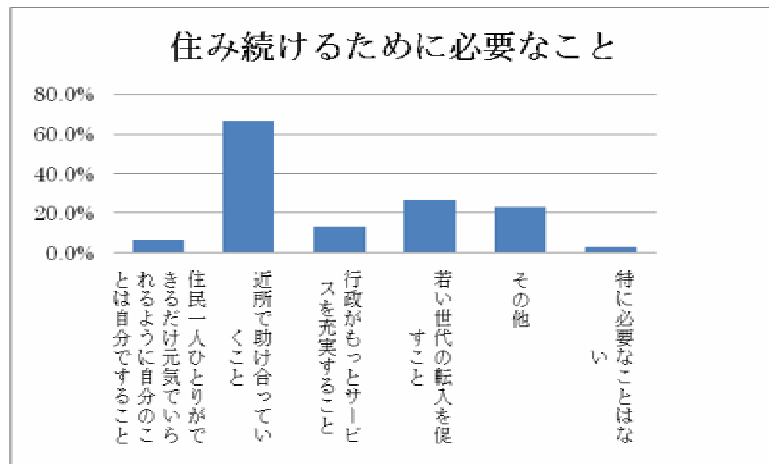


図 Y-1 住み続けるために必要なこと

## イ) 地域生活上の不便・不安

### 買い物に関して

「店が遠い」5 (16.7%) という意見が見られる。「その他」の内訳としては、「この地域は購買力がないせいかもしれないが品揃えが悪い。若い人はいいが年をとると遠くのお店には買いにいけない」(調査票 8)、「昔あったような日用品や食料品を扱う、小さな商店があると便利で良いと思う」(調査票 4) といった声が寄せられている。

### ゴミ出しに関して

「ゴミの分別が面倒 / 細かい / わかりにくい」1 (3.3%) という意見が見られる。また、「その他」の内訳としては、「もえるゴミが月・木だが、月曜日は振り替え休日でゴミ収集もお休みのことが多い。年間にすると多いので、翌日でもいいので収集してくれると助かる」(調査票 7)、「牛乳パックやトレーも今はスーパーまでもって行っているが、これらも資源ごみで回収してほしい」(調査票 4) といった声が寄せられている。

### 交通機関に関して

「バスや電車の便が少ない」2 (6.7%)、「バス停や駅が遠い」1 (3.3%) という意見が見られる。また、「その他」の内訳としては、「スクールバス (鶴高や羽室台高校行き) は一日一本しかない」(調査票 7) といった声が寄せられている。

### 道路に関して

「坂が多い」1 (3.3%) という意見が見られる。また、「その他」の内訳としては、「道路幅が狭く、電柱が多い。路地が多いので飛び出しの危険もある」(調査票 7)、「無断駐車が多い」(調査票 9) といった声が寄せられている。

### 人と集まる場所に関して

「公民館などが遠い」1 (3.3%)、「公民館などが使いづらい」1 (3.3%)、「近くに喫茶店などが無い」1 (3.3%) という意見が見られる。また、「その他」の内訳としては、「公民館があるが二階を使用しているため、二階まで行けない人がいる。手伝おうとしても遠慮するため、これからの建物にはエレベーターがあるとよいと思う」(調査票 15)、「地域の公民館は温泉と同時にできたもので、50 年位経っている。階段があり、畳で老朽化も進み、高齢者には使いづらい」(調査票 21)、「以前は温泉の隣にあったが、今は市が立ててくれて遠くなってしまった」(調査票 2) といった声が寄せられている。

火事や地震に関して

「木造が多くて火事が怖い」3(10.0%)、「家が古くて地震に耐えられない」3(10.0%)、「消防車が入れない」2(6.7%)という意見が見られる。

温泉に関して

「バリアフリーになっていない(段差が多い)」6(20.0%)、「マナーが守られていない」3(10.0%)という意見が見られる。また、「その他」の内訳としては、「マナーについては、古くからの常連達の座る位置まで決まっており、たまに行くとはみ出される事があるが、身体の不自由な高齢者には洗ってあげたり等、助け合う気持ちがみられる(調査票 21)」、「新しく温泉を作るときにバリアフリーにすべきだった。元気なうちは温泉にいけても悪くなったらデイサービスにいくしかない」(調査票 5)、「料金が70歳以上は無料だったのが4月から半分負担になる。市も苦しいのは分かるがどうかしてほしい」(調査票 10)といった声が寄せられている。

食事に関して

「食事を作るのが面倒」1(3.3%)という意見が見られる。また、「その他」の内訳としては、「仕事から帰って疲れているときは作るのが面倒になる。出前があると助かる。安い金額で若い人向けではなくあっさりしたのがあると自分が高齢になっても助かると思う」(調査票 4)といった声が寄せられている<sup>4</sup>。

以上のような地域生活上の不便・不安に加えて、「みらい信金がなくなってしまって困る人が多い。ATMは残るが、お年寄りには使えるか不安な人が多いようだ」(調査票 5)、「公園がない。松原公園は遠いし公民館のところの広場はあってもあまり散歩しようという気になれない」、「大きい病院が遠い。国立病院や新別府病院にしてもタクシーでいくとかなりかかる」(調査票 10)といった声が寄せられている。

## ウ) 近所付き合いと地域参加

被調査者のおしゃべり、相談相手の有無は、「そういった人がいる」28(93.3%)、「そういった人はいない」2(6.7%)という割合であり、非常に多くの方が日常的な社会関係を取り結んでいることが分かる。おしゃべりのための場所として、(自分が経営する)店舗という回答が比較的多く、共同温泉という回答も見られる。

また、日頃の地域活動としては、「自治会など地域行事・まちづくり活動」13(43.3%)が最も多く、それに「趣味や学習活動」10(33.3%)、「ボランティア活動」7(23.3%)、「老人会等の活動」6(20.0%)が続いている。その一方では、「地域内の活動には関わっていない」も9(30.0%)見られる。また、浜脇・松原地区の地域活動は、「地域のことはご主人にまかせて一切タッチしていない」(調査票 10)、「行事も多く、何かあれば皆すぐ集まり、男性群も協力的である」(調査票 21)といった男縁的な特徴も有している。

<sup>4</sup> その一方、「お年寄りの買い物かごを見ると、揚げ物が多かったり、偏っているように感じる。塩分を控えめにした方が良いと言われても、どうしたら良いか分からない人もいると思うので、『こういう風にすると良いですよ』とか、『色のついた野菜はこれくらい食べた方が良いですよ』とか、栄養士のような人に来てもらって栄養指導をしてもらったらどうだろうか」(調査票 5)というような、高齢者の食生活のアドバイスに対するニーズも見られる。

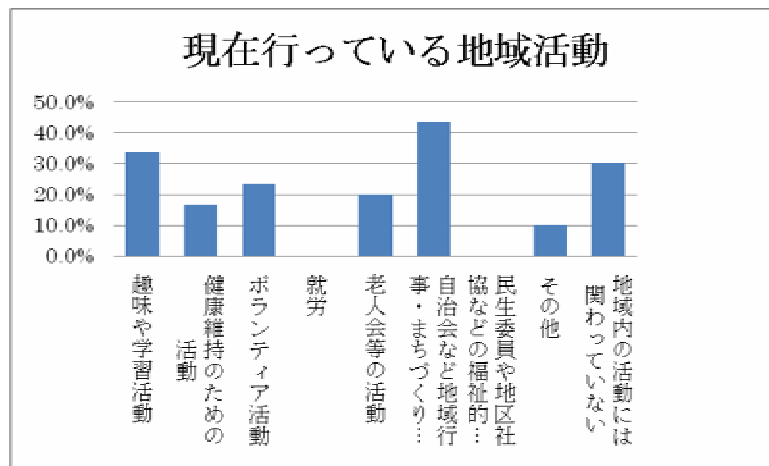


図 Y-2 現在行っている地域活動

今後携わりたい地域活動としては、「自治会など地域行事・まちづくり活動」11(36.7%)が最も多く、それに「一人暮らし高齢者の見守り・声かけ」8(26.7%)、「ゴミ拾いなどの環境活動」7(23.3%)、「敬老会などの準備」5(16.7%)が続いている。「サロンなど交流の場の世話役」も3(10.0%)見られる<sup>5</sup>。

また、「その他」の内訳として、「今まで母親クラブを立ち上げたり、様々な活動をしたりがりしてきたがこれからは若い人たちを指導育成していきたい。ある程度若い人に任せて私たちの世代からバトンタッチしたほうが新しい形で地域が活性化されるのでは(調査票3)」「もっと年齢がいったらいろいろしたいと思うが今はかかわりたくない。地域の高齢者が仕切っているので高齢者の意識が変わらないと難しい(調査票9)」といった声が寄せられている。

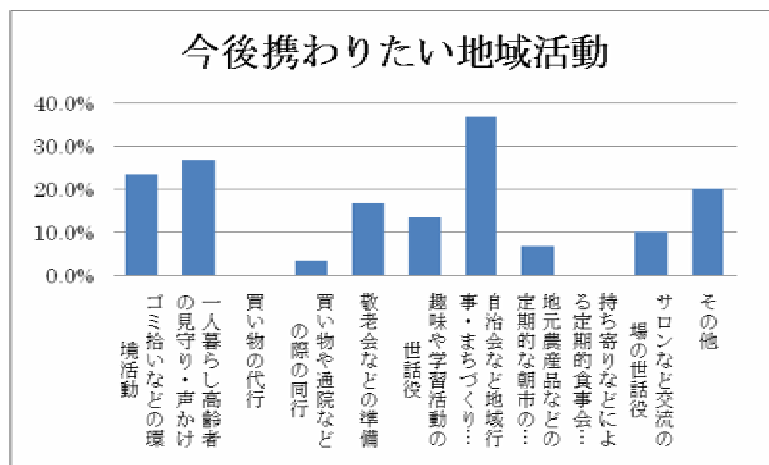


図 Y-3 今後携わりたい地域活動

<sup>5</sup> 交流の場づくりについては、『『交流の場を作りました、全部揃っているから遊びに来てください』では、誰も行きたがらない……手間がかかるとは思うが、寄付を募って地域の人をまきこんだ方が、自分たちの交流の場だという意識が生まれる』(調査票5)というような意見も見られる。

## (2)まとめ

本調査は、一人暮らし高齢者に対する支援の担い手となる、地域住民の活動ポテンシャルについて考えることを目的としたものであった。

まず、住民がずっと住み続けるために必要な事柄として、「近所で助け合っていくこと」が高い割合であることが注目される。現在、地域活動の中心を担っているのは高齢世代である場合が少なくないが、今後の地域活動は「それぞれの世代が仲良く、横のつながりを持つこと」、「若い世代が地域の催しに参加し、世代から世代へ地域の役割を受け継いでいくこと」の必要性が覚知されている。ただし、「地域の高齢者が仕切っているので高齢者の意識が変わらないと（地域活動へ関わることは）難しい」という声に見られるように、世代間の関係が必ずしもうまくいっているとはいえないことが窺われ、住民にその必要性が認識されている「若い世代の転入を促す」ためにも、世代間の関係調整の必要性が指摘されよう。調査対象者には、「これからは若い人たちを指導育成していきたい。ある程度若い人に任せて私たちの世代からバトンタッチしたほうが新しい形で地域が活性化されるのでは」という高齢世代、「この地域が大好き」という若い世代もいることから、その役割を果たす人が地域内に育つ可能性も感じられる。

このような世代内、世代間の関係を育む「交流の場」として、温泉や（それに併設する）公民館といった、公共空間の重要性が指摘されている。しかし、「公民館があるが二階を使用しているため、二階まで行けない人がいる」。「以前は温泉の隣にあったが、今は市が建ててくれて遠くなってしまった」というように、温泉の近くに階段を昇らなくても利用できる公共空間を求める声がみられる。

現在行っている地域活動として、「自治会など地域行事・まちづくり活動」を中心として、「趣味や学習活動」「ボランティア活動」「老人会等の活動」等が幅広く認められ、今後携わりたい地域活動としても、「自治会など地域行事・まちづくり活動」の他に、「一人暮らし高齢者の見守り・声かけ」「敬老会などの準備」「趣味や学習活動の世話役」「サロンなど交流の場の世話役」など幅広く回答がなされている。また、高齢者の食生活の偏りを心配して栄養指導を提案したり、交流の場について「寄付を募って地域の人を巻きこむ」ような共助的なあり方も提案されている。

当地域は、女性も高齢になっても旅館等でパート等で働き、ボランティアの担い手が少ないといわれている地域であるが、以上のように、調査結果からは支援の担い手としての潜在的可能性は相当程度存在すると認められ、それを引き出し、調整する人材が最も求められているといえよう。